農村生活空間における大切な場所の景観的特徴に関する研究
－山梨県北社市津金地区を対象として－

山梨大学工学部土木環境工学科　　○学生会員　後藤　晃宏
山梨大学大学院医学工学総合研究部　　正会員　大山　勲

１、研究背景と対象、目的

2005 年の景観法全面施行を受け、景観への意識の高まりから、文化財保護法が改正され、新たに文化的景観が保護対象となった。しかし文化的景観と同等に、日常生活の中に存在するごく普通の生活景観も大切であるといえる。

生活景観は、日々の生活に根ざした身近な景観であるために、日頃はその価値に気づきにくく、何であるか十分に認知されているとは言い難い。しかし各地域における生活景観は、その地域において継承されてきたものであり、文化的かつ独特である。よってその地域独自の景観を今後も守り、次世代へと継承していくことが必要である。

そこで山梨県北社市津金地区で住民へのアンケート調査により「生活空間にある大切な場所」が 193 箇所挙げられた。その理由として、その場所に対する考えや印象などの「思い」、「場所」の種類、その場所から見える「眺め」、その場所で何をしていたかの「行動」の４要素がある。

２、研究目的

そこで本研究では、それらのうち、「眺め」の記述があり、景観が良いとして挙げられている 51 ヶ所を対象とし、景観的特徴を把握することによって、その地域に住む人々が大切に思う生活景観を抽出、分類し景観的特徴を把握することを目的とする。

３、研究方法

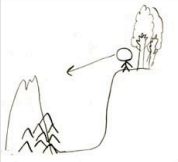
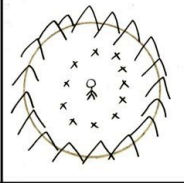
「生活空間にある大切な場所」として挙げられた場所へ行き、写真を撮り、パノラマ写真を作成することで、構図の構成要素を把握し、その空間の構図のパターンを分類し、それらの景観的特徴を把握する。

４、「生活空間にある大切な場所」の特徴把握

４－１構図の分類

近景から遠景まで構成要素を基に分類をおこなったところ構図のパターンを６パターンに分けることができた。

表１、構図のパターン図

タイプ	分類	パタ図	特徴	該数（箇所	構成％）
開放	①		近景は通しの良い畑が広がる 中景は野が広がる。 遠景は八岳や南アルプスが望めるが遠方向地域シボル存在するのもある。	24	47
	②		近景見通の良い畑だが。 中景は野が広がる。 遠景は南アルプス望める。 ま逆方向野山が視界開ける	9	17
半開放	③		近景は高い畑家など遮られ視界遮れる 中景は野が広がる。 遠景は南アルプス望める ま逆方向は野山存在ないため部視界が開け開放的ある。	5	10
	④		俯瞰ありの方向関は視界開け開放的である。	3	6
閉鎖	⑤		近景は高い丘家ある為閉鎖あるかし地のシボルである神社が見る。 中景は平野山だが。 閉鎖はあが遠景南アルプスや岳確できる	7	14
	⑥		近景は樹や木なが見れる。 中景は野が広がる。 遠景視界悪望ない	3	6

キーワード：農村景観、日常生活の中の景観、大切な場所
連絡先：山梨大学工学部土木環境工学科〒400-8511 山梨県甲府市武田４－３－11

①は、視点場の特徴として、見晴らしが良く開放的。またそれに関係し、近景には見通しの良い畑が一面に広がる。中景には、野山が広がり、遠景には、八ヶ岳や南アルプスが望める。
また見晴らせる距離が 100m～700m ととても遠い距離まであり、見晴らし角度が 180°～360°と広域にある。

②は、視点場の特徴として、見晴らしが良く開放的。近景には、一本松、三代校舎などの地域のシンボルや見通しの良い農地が見られる。中景には、野山が広がり、遠景には、南アルプスが望める。また遠景方向に限っては野山がなく視界が開ける。
また見晴らせる距離が 100m～400ｍと遠い距離にあり、見晴らし角度は 180°～360°とこれも広域である。

③は、視点場の特徴として、周囲が野山や小高い丘に取り囲まれ、見晴らしが悪く閉鎖的。近景には、地域のシンボルである、藤岡神社の赤い屋根の建物がある。中景には、野山が広がり、遠景には、南アルプスや八ヶ岳が望める。
見晴らせる距離は 0m～50ｍと、とても狭い範囲であり見晴らし角度は 10°～30°とごく限られた範囲であった。

④は視点場の特徴として周囲が木や家で囲まれているため閉鎖的ではあるが、一方向は俯瞰景であるため視界が開ける。

⑤は、視点場の特徴として、周囲が野山や小高い丘に取り囲まれ、見晴らしが悪く閉鎖的。近景には、地域のシンボルである、藤岡神社の赤い屋根の建物がある。中景には、野山が広がり、遠景には、南アルプスや八ヶ岳が望める。
見晴らせる距離は 0m～50ｍと、とても狭い範囲であり見晴らし角度は 5°～60°とごく限られた範囲であった。

⑥は視点場の特徴として、全域において見晴らしが悪く閉鎖的。近景には、建物や木々などが見られる。中景には、野山が広がる。遠景は、視界が悪く望めない。見晴らせる距離は 0m～50ｍで、見晴らし角度は 0°であった。

４－３、開放感、閉鎖間について

①、②は見晴らせる距離までが、最小 100m、最大 700m と、かなり遠い距離にあり、尚且つ見晴らしの良い方向が 180°～360°と広域にある。一方、③、④、⑤では見晴らせる距離が 0～50ｍととても近い距離にあり、尚且つ見晴らしの良い方向は 0°～60°と狭域である。このことが、開放感と閉鎖感を感じさせる大きな要因であることが分かった。

このことから近景に電柱や建物、木々などが、あったとしても、約 100m 範囲内に存在しなければそれらの構成要素は、あまり開放感の有無には比較的関係しないといえる。

５、まとめ

以上の分析を総合的に考えると、「生活空間にある大切な場所」を、6 パターンの構図に分類することができた。さらに、見晴らし距離と、見晴らし角度の違いによって開放的な構図と、閉鎖的な構図にも分類することができた。

開放的な構図の特徴として、近景、中景、遠景を通して見晴らしがよい。

閉鎖的な構図の特徴として、遠景方向の近景、中景に視界を遮る構成要素が存在し、見晴らしが悪い。また一部開放的な構図の特徴として、閉鎖的ではあるが、一方向は俯瞰景であるため視界が開ける。

これらが生活空間として住民が「大切な場所」として残していくべき場の重要視している景観的特徴である。

６、今後の課題

今回は一つの地域でのみ景観的特徴を把握したので他地域においてとの共通点、差異点が見えてこなかった。よって、今後は地域との比較をする事により、住民はどのような生活景観を重要視するのか把握していきたい。